

〔論文〕

情報社会における脱埋め込みと再埋め込み

—暴走する選択プロセス・かけがえなさの喪失—

安倍 尚 紀

【要約】

本稿の目的は、社会学の分野における「脱埋め込み」(Disembedding)「再埋め込み」(Re-embedding)という概念を通して、変化の目まぐるしい情報社会における社会学が果たす役割について、考察することである。

ポスト近代社会において、新技術の発展と浸透に伴って(特に情報化と国際化に際して)、「選択肢の増大」や「比較」が常態化するようになった。それまでの伝統に対抗して起こりはじめた脱埋め込みは、対象から、かけがえなさを奪うことでもあり、やがては止まらない(再埋め込みを求める)プロセスとしてさまざまな問題の原因となってきた。本稿は情報社会学の立場から、原理原則まで立ち戻りつつ、基礎的な考察を試みてみたい。

キーワード: 脱埋め込み 再埋め込み かけがえなさ AIの学習データ

Disembedding and Re-embedding in Information Society
—Unstoppable Process of Identification and Loss of Unique Identity—

NAOKI DN ABE, Ph.D

The purpose of this paper is to study concepts “Disembedding” and “Re-embedding” and to rethink the role of Sociology in the course of rushing information society. After the modernization and adoption of new technologies [both in ICT and transportation field], we are suddenly confronting against the daily needs for selection and comparison of the choice done by ourselves. Disembedding resulted in unstoppable process of pursuing identification for everything, depriving uniqueness of entity. Thus we, going back to the sociological principle, would like to proceed the essential study of these concepts including social changes in scope.

Keywords: Disembedding, Re-embedding, Uniqueness, Training Data of Deep Learning

^a 大分県立芸術文化短期大学

Oita Prefectural College of Arts and Culture n-abe@oita-pjc.ac.jp

1. 問題の所在・研究の目的

本稿の目的は、「社会学の分野における「脱埋め込み」(Disembedding)」「再埋め込み」(Re-embedding) という概念を通して、変化の目まぐるしい情報社会における社会学が果たす役割について、考察することである。

「脱埋め込み」と「再埋め込み」という概念に注目したのは、イギリスの社会学者、A.ギデンズである (Giddens 1990=1993)。「再帰性」という概念まで含めると、これまでも多くの社会学者によって言及されてきた (中西2008、吉田2012)。

安倍 (2010) にアーカイブズ・記録管理の原理原則として「情報社会」について考察したのと同じように、本稿の独自性は、タイトルに含まれる通り、「脱埋め込み」と「再埋め込み」を考察する背景に、現状の新しいメディア技術 (情報社会) を念頭に置いている点にある。詳しい例を挙げれば、国内外の社会で、AI (人工知能) やIoT (モノのインターネット)、ブロックチェーン、ロボットによる自動化がインターフェイスを問わず、私たちの日常生活の中に浸透してきている。水面下でやり取りされる膨大なデータの流れは、表向きには見えず、スマートフォン等の便利なサービスとしてしか、認識されない (スマートフォン)。例えば、2022年11月に商用利用可能な形で無料リリースされたStable Diffusionバージョン2.0は、画像生成AIの世界に強烈な破壊的イノベーションをもたらしたが、エンドユーザーにとっては、もともとシンプルな形で、スマートフォンサービスの一つ増えたとしか認識されない。

こうした状況下、続けて以下では、情報社会の原理原則に遡りつつ、「脱埋め込み」と「再埋め込み」について考察していきたい。

2. 「脱埋め込み」の社会的背景① (時間と空間の分離)

「脱埋め込み」とは、社会関係をローカルな【埋め込まれた】コンテキストから引き離して、「時空間の無限の拡がりの中で再構築すること」を指している (Giddens 1990=1993: 102-112)。^②

近代以降、もともと強烈な脱埋め込みは、伝統社会における「いま・ここ」というローカル時間・ローカル空間からの脱埋め込みであろう。象徴的に言えば、前近代の伝統社会での日常生活には、一律の「時計時間」(clock time) は存在しなかった。例えば日本における時間でいえば、それぞれの地域における「明け六つ」(日の出) から「暮れ六つ」(日の入り) までの不定時法(「いま」という時間) に埋め込まれており、もし一般人として生まれたならば、死ぬまでにそんなに遠く移動することもなかった(「ここ」という場所への埋め込み)。家や地域社会の限られた範囲で、その場所その場所の特定のローカルな【埋め込まれた】時間・空間において行動していたため、「他の場所」はせいぜい隣村という程度でしかリアリティを持って想像しえなかったというわけである。つまり、前近代的な伝統社会では、「いま・ここ」へと「時間と空間が結合(convergence)」した状態だった。

ここに、時間と空間の分離 (distanciation) が起きたのである。例えば、機械時計による一律の「時計時間」が持ち込まれ、通信・コミュニケーションや移動・輸送の手段が普及して、書物や世界地図も持ち込まれた^③。そうすると、別の場所を見聞する機会がもたらされ、少なくともニュース等で、他の場所をリアリティを持って想像できるようになった。他の地域への想像力、「いま・ここ」(ローカルな場所・空間) から分離した「世界」「社会」という概

念が生まれて（「公共性の構造転換」）、時間と空間は標準化され、形式化・抽象化された。

※これは「収縮していく世界という——陳腐な表現に再び陥らずに論ずることがいまやほとんど不可能な現象」である（Giddens 1985 ≡ 1999: 174 ≡ 202-203）。近代化以前の世界にあつては、時間と空間は渾然一体とした『いま・ここ』にいる私にとつてのものでしかなかった（また、そうした私によるリアリティは、自分の身の回りの共同体を超えて共有されるものではありえなかった）。時間と存在とが概念上で分離することに理論的説明を与えるにはユークリッド幾何学の登場を待たねばならないが（「時間空間の分離（dissociation）」^③）、運輸技術・情報技術の浸透^④によって、世界に前人未到の場所などなくなり、電話や交通のネットワークが張り巡らされた世界において、移動に関する時間のうえでも、また空間（距離）のうえでも、われわれの住む世界はますます収斂していき、遠くの街はより近くに感じられるようになったのである。

3. 「脱埋め込み」の社会的背景②（伝統から合理性・再帰性へ）

さて、「脱埋め込み」は、人々の生活をローカルな「いま・ここ」の文脈から切り離れたのみならず、付随してさまざまな前近代的な「伝統」からも人々を解放していった。ローカルな「いま・ここ」に埋め込まれていた状態から、「別様の時間・別様の場所」との比較が出現してくる以上、これまで埋め込まれた状態で盲信してきた伝統的な制度・慣習・知識について疑念が生じ、比較へと繋がるの

は当然の展開であろう。

もともと、「**【伝統】**」を重んじる共同体では、伝統的な制度・慣習・知識について、「昔からそうしているのだからそうする」のが正しい振舞いだつた。唯一の「いま・ここ」に埋め込まれていたため、疑いもなく「昔からそうしているのだからそうする」のが自然だつた。ところが、それに対して、前節に見てきたように、別様の時間・場所からの情報が入ってくると、それらは別様の選択肢として、比較の観点が登場してくるというわけである。

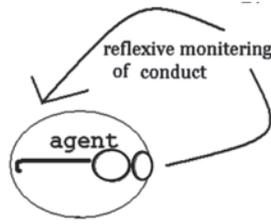
したがって**【近代】**社会では、過去になされてきたことがどうであれ、それを別様に行ったほうがよりよいのではないかという観点から、あらゆるものが再検討の課題となってしまうようになる。先述のギデンズが、教科書『社会学』において世界的な非婚化を指摘しているように、現代人にとつて、こうした選択肢の増加は必ずしも、良いことばかりではない^⑤。

以上のことは、いわゆる社会学における「再帰性」として論じられる内容に重複する。次ページに図示したのは、行為の「再帰的なモニタリング」と呼ばれるものだ。常に自分の状況を自覚・モニタリングして、別様の選択肢を見出す主体をモデルとして想定している。ミクロな意味での再帰性と呼んでおこう。

では、マクロな意味での再帰性とは何か。先に、選択肢の増加は必ずしも、良いことばかりではないと述べたが、この意味では選択を強いられること、再帰性は否応なく、見境なく機能することになる。

「慣習の修正が、物質的世界への技術的介入を含め、原則として人間生活のすべての側面に徹底して及んでいくようになるのは、近代という時代が

初めてである……モダニティに特徴的なのは、目新しいものをそれが目新しいという理由だけで取り込むことではなく、再帰性が——もちろん、省察それ自体にたいする省察を含め——見境もなく働くことなのである」(Giddens 1990 = 1993 : 56)。



ページ下部の図のように、マクロな意味での再帰性とは、先のミクロな意味での再帰性を持った主体、つまり常に自己の在り方を見据えて伝統を疑い、省察を続ける主体(脱埋め込みされた主体)が、社会全体に散らばった際に想定される「再帰的近代社会」を表している。当初の「単純な近代化」の段階では、例えば高度経済成長期の日本において人々が古い家長制の慣習を疑い、そこからの脱却を企図したように、(例えば、他の選択肢との比較を通して)再帰性はシンプルに強力に、伝統からの脱埋め込みとして機能した。しかし、その段階を経て、もはや再帰性は否応なく、見境なく機能する段階に入ってしまった。当初、伝統を打ち壊した他の選択肢との比較は、その後も、常に突きつけられ続けることになるのである。

ここでのポイントは、比較の導入と選択肢の増大である。例えば神道やイスラム等の宗教的な世界観において、他の選択肢を持ち込まないまま、他の世界観との比較をしない、伝統に依拠していた時代(埋め込まれた状態)は、ある意味で迷いがなく、とても楽に生活することができる。しかし、ひとたび、この世界観を脱埋め込みして比較の視点を持ち込み、選択肢を増やすとどうなるだろうか。現実性(後述する「再埋め込み」)を追い求めてもがいた結果、不

現実性を増大させてしまうという逆説をもたらしたのが「再帰性」、再帰的近代である。



さて、ここまですまともな理由。伝統からの脱埋め込みは、合理性にもとづく比較の導入と選択肢の増大につながったが、反面で、伝統が提供していた絶対的な安定を失ってしまった。例えるなら、これまで部族社会において伝統的な慣習や宗教を盲信して意思決定をしていたAさんが、突如、インターネット上の他の事例や価値観を参照するようになり、多くの選択肢と比較の視点を得た状態になった(脱埋め込み)。「さあ一体、私の幸せはどこにあるのでしょうか」、と迷うようになる。

この意味で脱埋め込みは、即時、比較と選択肢の増大、不安定化につながる。同時にまた、「かけがえなさ」を奪うことでもある^⑧。

そこで登場するのが「再埋め込み」の必要性である。以下に検討していこう。

※ 他の社会科学と比べても特に、社会学の入門書においては、「脱常識」であるとか「別様である可能性」が重要であると言われる。そのような文脈においては、「脱埋め込み」(dis-embedding)は、(伝統から脱却していく際に)近代以降の我々に突きつけられた社会現象であるとともに、社会学の原理原則(論理操作)の一つだと言える。

4. 比較の上での信頼による「再埋め込み」

「脱埋め込み」が伝統の安定性（埋め込み状態が提供する、ある意味での安定^⑦）を奪ってしまう以上は、その後の「再埋め込み」(re-embedding)によって補完されなければならない。「再埋め込み」とは、「脱埋め込みを達成した社会関係が、時間的空間的に限定された状況のなかで、再度充当利用されたり作り直されたりしていくこと」を意味する。典型的な例が、一時、世界の各地で起きたとされるマクドナルド化とその反応である。（例えばマクドナルドやデニーズ等のファストフード等）グローバルゼーションによって影響を受けた地域の食文化が、新しい要素を採り入れながら、再度のローカル化を図っていく姿は再埋め込みである。

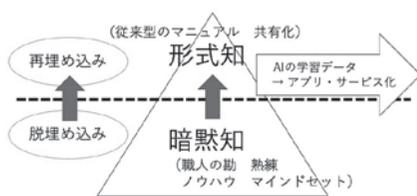
それまで閉じた社会において維持継続していた伝統が脱埋め込みされた後、再び、依拠する準拠点を求めることになるが、その際に依拠するのが、先述のギデンズの見解によると、「抽象システム」(abstract systems)である。例えば、その選択が収益性や金銭的な価値をもたらすかどうか（貨幣money）や、いかなる科学的な根拠があるか（専門システムexpert systems^⑧）といった信頼できる外部の保証が再埋め込みの拠り所となっていく。

脱埋め込みは、貨幣や専門システムのような「抽象システム」に対する「信頼」（顔の見えないコミットメント）によって支えられなければならないが、それは多くの場合、より基本的な「信頼」としての「顔の見えるコミットメント」、すなわち「ともにそこに居合せている状況のもとで確立する社会的結びつきによって維持される信頼関係」によって補完されなければならないのである（Giddens 1990 = 1993 : 102-12）。

貨幣をはじめとして、コミュニケーションや交換を媒介するメディアとしての「象徴的通標」(symbolic tokens^⑨)と、科学技術・文明の道具の発展に寄与する「専門システム」によって、抽象システムは、文字通り「今、ここ、私」を抽象化・数値化し脱埋め込み、再埋め込みする。こうした抽象システムへの信頼は、すなわち、どの選択肢をベストと判断し、どれを切り捨てるかという問題として、われわれに突きつけられる。この時、信頼は「決断の背景となる心理的な態度」であるとし、人格の発達の中で形成される、すなわち個人差が大きく、ある種の作法として、トレーニングが必要だとギデンズは指摘している。選択肢の増大に迷うだけでなく、「かけがえなさ」のバランスは、コスト・パフォーマンス（コスト、タイム・パフォーマンス（タイパ）の良さをどこまでも追究してしまう現代人にとっての課題である。^⑩

5. 中括

社会学の中でも筆者の専門としている情報（メディア）技術について、同じく専門フィールドの一つとしている東南アジア、そして中国の深圳のような地域と比べてみると、日本は概して「完備しすぎてしまっている国」といえる。どういふことかという点、我が国は、経済成長期における国内の一丸となつての努力で、法律や制度、メタルの通信線や電気ガス水道、物流網のような物理的なインフラ等々、他の周辺諸国に先んじて早々に、国内の隅々までかなり完成した国家となつたことがある。その卓越した完成度と自信は、2000年あたりから徐々に、その完成度の反面、ある種の安堵感とハ



ングリー精神の欠如とをもたらしてしまっただけではないだろうか。本稿の検討に照らして言えば、「完備しすぎてしまっている国」(1) とうの昔に脱埋め込み・再埋め込みを終えてしまい、安定している国であると言える^{①)}。

近年では、例えばスマートフォンの普及率などにおいては、アジアの他国と比較すると、いわゆるディープテック^{②)} によるリープフロッグ現象が見られるようになった^{③)}。その他にも、快適な日本に比べるとほとんど接触機会はないが「〇〇」(モノのインターネット)、ブロックチェーン、ロボット等の自動化、それらのバックグラウンドで機能する「AI(人工知能)」など、アプリケーションやサービスの点で、インターフェイスを問わず、私たちの日常生活の中に浸透してきている。特に、スマートフォン端末の水面下でやり取りされている膨大なデータは、表向きには見えないため「スマート化」として進行し続けている。

最後に、「脱埋め込み」「再埋め込み」の概念を踏まえ、経営学や組織論、ナレッジマネジメント分野においてたびたび言及される「暗黙知の形式知化」に重ねて、近年の技術を用いたサービスを上記のように図示してみた。特筆すべき点は2点、知識のインプットとアウトプットにある。

第一に、インプットについて。従来、暗黙知の形式知化においては、職人や熟練者のノウハウやマインドセット等々、属人的に埋め込まれた要素を脱埋め込みして、誰もが使えるようにマニュアル化する等、知の共有化を

図ってきた。しかしピラミッドの右向きの矢印に記載してあるように、「AIの学習データ」は、結晶化された「形式知」のみに限らない。例えば何千枚ものレントゲン写真と病巣の情報、イラストとその意味付けや解釈、売り場で顧客が買っている風景、同線と購入風景を録画したビデオ。タクシーの乗車地点と降車地点と時間、天候データやイベント情報、POSを入力するような顧客データ、決済情報。AIは、そうした種々のその場の「今、ここ、私」に埋め込まれた「生データ」を脱埋め込みして意味とひも付けて学習の材料とする(コンピュータの性質上も、抽象化し、脱埋め込みした形でしか認識できない)。これは現在、多くのサービスの現場、店舗で進行しつつあることである。

第二に、アウトプットについて。再埋め込みの出口として、我々の気づかないうちに水面下で、例えばこの学習データまで含めて、「ユーザインターフェイス」上は、私たちが日常的に使っているスマートフォン上のアプリをはじめとしたサービスとして、即時、新しいサービスは、今後も次々と何食わぬ顔で、目の前に現れてくることである。このことは、潜在ニーズの顕在化(暗黙知の形式知化)という意味でも、重要な事実である^{④)}。

脚注

- ① 例えば、「目の前にいる、うちの家族」を埋め込まれた状態とすると、このコンテキストから引き離して「よその家族」「別の時代の家族」として捉えるのが「脱埋め込み」といえる。
- ② 機械時計と地図の導入によって、時間と空間とがともに均一・均質に測定・管理可能となった点が、「時間と空間との分離」のポイントである(Giddens

1990：17-21=1993：31-5)。さらに言えば、こうしてもたらされた人々の意識の変化こそが、重要な点であろう。

- ③ ギデنزは後に、「収斂」という考え方をさらに精緻化して、「時間と空間の分離[disfranchitation]と再結合を論じている。「100m先の地点と10km先の地点が連続した地平であるように感じられる」には、機械時計によって計測された時間のもとに、空間が連続したものとして把握される必要がある。時計時間の登場が、いま・ここでしか考えられなかった時間と場所の概念を分離した。教会の鐘(や寺院の刻)によってそれぞれの場所で知らされていったローカルな時間は、時計時間によって世界的に統一された。今という瞬間、私はこの場所にいるが、同時に、100m先の地点にいる私というのも考えうるし、10km先、あるいは異国にいる私も存在しうる。時間と場所というのは、別々に考えうる存在になったのだ。時には畏怖さえともなつて語られた「フロンティア」や「西部」という言葉に表象されるような、未知なる空間はなくなつた。リアリティとして均質な時計時間によって世界は再結合された。
- ④ 情報化は、運輸の発達において不可欠の要素である。なぜなら、「大量輸送は、正確に時間調整され、『空間調整された』移動を必要とし、逆にそうした移動は、計画されたことから『先行して』意思の疎通ができることを前提にしてゐる」からだ(Giddens 1985=1999：175-203)。そうした「情報化」という条件のもとではじめて、運輸システムの「運営」が可能になつたといえる。したがつて情報化は、運輸システムにおける機械化とあいまって、世界を収斂させてきたといえよう。
- ⑤ ギデنزが指摘するのは、(1)統計において離婚率の上昇を目の当たりにした夫婦が離婚に踏み切るケース、(2)他のカップルの事例をたくさん見ることによつて、「もつといい人がいるかも知れない症候群」とでもいべき状態に陥るケースである。

⑥ 例えば、色々な商品の中でも、不動産物件や美術作品は、さまざまな人間がかけがえない個性を持つように、全てが「一点もの」であり、一物一価の法則が該当する。一般商品やコピー商品として脱埋め込みしきれずに残留するかけがえなきが、価値の源泉となる。

⑦ この部分は、山岸俊男が論じたりリスク概念の登場、「安心社会から信頼社会へ」の論点と重複する(山岸1998)。

⑧ 「専門システム」とは、「我々が今日暮らしている物質的社会的環境の広大な領域を体系づけている、科学技術上の専門家知識の体系のこと」である。専門家システムは「社会関係を前後の脈絡の直接性から切り離し」ていく。他方、専門技術的な知識はこれと同時に、一般大衆からの批判にさらされることによつて担保される性質を持つ。

⑨ 「象徴的通標」とは、「いずれの場合でもそれを手に入れる個人や集団の特性に関わりなく『流通』できる、相互交換の媒体」を指す。ケインズやジンメルを参照しつつ、ギデنزが貨幣について、時間・空間上の隔たりがある行為者同士の取り引きを可能とするという意味で、「時空間の距離化の手段」だといふ。

⑩ 正村俊之(1996)は、社会情報システム(活字メディアに始まるマスメディア)を念頭に、「脱コンテクスト化」と「再コンテクスト化」について考察している。「再コンテクスト化」は、「コンピュータに関連する情報テクノロジーの発達」による「情報画像能力の飛躍的向上」が、「いま・ここ」からの脱却という意味での「脱コンテクスト化」のみならず、「時間的距離や空間的距離を克服するからこそ、逆に『いま・ここ』に対する志向性を強めていく」といふ(正村2001：284)。

⑪ また同時に、東南アジア地域においてはイスラム教あるいは文化的な規制等は強いのだが、反面、日本に比べると商業上の法的規制が少ないこともあるだろう。大企業などアクターのロビイングなども、そこまで強いわけでは



ない。新しいメディア技術をいち早く商用化したいベンチャー企業にとっては理想的な情報環境であるといえる。

⑫ 最新技術だけでなく「枯れた技術」をも総動員して、本質的な社会課題 (deep issues) の解決を目指す点がディープテックの特徴である。丸・尾原 (2019) に事例紹介がなされている。

⑬ またその先に登場する「リバース・イノベーション」(発展途上国で生まれたイノベーションが、先進国に逆輸入される現象) が見られるようになってくる。端的に東南アジアの国々の多くでは、日本にいるときよりはるかに快適・スマートフォンのアプリによって、安価に、UberやGrabのような配車アプリサービスを用いてタクシーで移動し、宅配サービスを用いて商品やサービスを購入し、スマートフォンのモバイル決済で支払いできる状況がでてきているのだ。しかも、特にタクシー価格は価格破壊と同時に、対応する保険やレンタルサービスなど、新しい市場をも創出している。

⑭ 安倍 (2018) では、こうしたサービスの登場について、マッチングサービスの登場を例に、「潜在的ニーズの顕在化」として論じた。スマートフォンをプラットフォームとして、アプリやアクセスしやすいサービスの形で、「いつでもどこでも」「安心して」、商品やサービスを届けてもらえるという状況が出現している。

文献

- 安倍尚紀、2010、「1章 社会学によるアーカイブズ論のための基礎的考察」、国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『アーカイブズ情報の共有化に向けた』、岩田書院、pp.15-39
- 2018、「情報社会の原理原則としての中央集権型システムと自律分散型システム」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要第55巻』: pp.269-278
- Giddens, A., 1985, *The Nation-State and Violence*, Polity (=1999、松尾精文、小幡正敏訳、『国民国家と暴力』、而立書房)
- 1990, *The Consequences of Modernity*、Polity Press (=1993『近代とはいかなる時代か?』松尾清文・小幡正敏訳、而立書房)
- Giddens, A., Beck, U., Lash, S., 1994, *Reflexive Modernity*, Polity (=1997、松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳、『再帰的近代化』、而立書房)
- 丸幸弘・尾原和啓、2019、『ディープテック』、日経BP
- 正村俊之、1996、『脱コンテクスト化と再コンテクスト化』、『社会学年報25号』、東北社会学会、pp. 27-63
- 2001、『コミュニケーション・メディア』、世界思想社
- 中西真知子、2007、『再帰的近代社会』、ナカニシヤ出版
- 山岸俊男、1998、『信頼の構造』、東京大学出版会
- 吉田純、2012、『再帰性概念の社会情報学的意義についての予備的考察』、『社会情報学 1巻1号』、社会情報学会、pp.55-63
- 本研究の成果の一部は、JSPS科研費22H00919 (基盤研究(B)「国際比較に基づく記録の公開と共有がもたらす社会の維持と変容に関する研究」(研究代表者・藤吉圭二)(追手門学院大学教授)の助成によるものです。